
遥くんとペルソナと愉快？な仲間達

マイマイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遙くんとペルソナと愉快？な仲間達

【Nコード】

N9252Z

【作者名】

マイマイ

【あらすじ】

世の中は不思議に溢れている　そんなお袋の言葉は現実となった。怪奇殺人事件が起こった地方都市稲羽市で、俺は沢山と仲間と共に謎の解明を急ぐ………　んだけどさ、俺だって青春真っ盛りなんだから、恋や友情を育みたい訳よ！！果たして俺に彼女はできるのか！？ついでに事件は解決できるのか！？

「ついでの方がおかしいだろうが!」

〜プロローグ〜（前書き）

物語の始まりは、びっくりするくらい怖いおじいさんと、びっくりするくらい綺麗なお姉さんに会う事でした……。

くプロローグ

ようこそ、『ベルベットルーム』へ

目を開けると、俺は不思議な空間に居た。

空間といっても、自分が居る場所は高級感溢れるリムジンの中。

しかし、窓から映る景色は霧に包まれ……身体もふわふわとして現実味がまるで感じられない。

そして 俺の目の前には、不思議な老人と隣に座る1人の女性の姿が見えた。

尖った耳に、不気味で大きな目と鼻、綺麗なスーツで身を包んでいるが……得体の知れない存在なのは間違いなかった。

「ほう……これはまた、変わった定めをお持ちの方がいらしたようだ……」

不気味に笑いながら、そんな事を言ってくる老人。

「私の名は『イゴール』……お初にお目にかかります」
わたくし

「あつ、どうも……」

自己紹介をされたので、おもわず返事を返しながら頭を下げる。

「ここは夢と現実、精神と物質の狭間にある場所……」。

本来は、何かの形で“契約”を果たされた方のみが訪れる部屋で
ございます。

貴方には、近くそうした未来が待ち受けているのやも知れませ
な

「??????」

意味がわからない。

目の前のイゴールという老人の言葉も、ここが何処なのかも理解で
きなかった。

けれど、こんなにも異常だらけな状況だというのに……俺の心は落
ち着いていた。

「どれ……まずは、お名前を伺っておくと致しめしうか。
貴方様の名は、何と申されるのですかな？」

「……稲葉、遥」

あっさりと、俺は老人の疑問に答えてしまふ。

「稲葉遥様……ふむ、なる程。」

では、貴方の未来について少し覗いてみると致しめしうか」

「えっ……？」

「“占い”は、信用されますかな？」

「えっ、あ、はい……信じます」

そう答えると、イゴールは「それは結構」と言いながら……いつの間にか自分の前のテーブルに置かれていたカードを並べ始める。

「常に同じにカードを操っておるはずが、まみえる結果はそのつど

変わる。

フフ、まさに人生のようでございますな」

言いながら、一枚のカードを表にするイゴール。

「ほう……近い未来を示すのは“塔”の正位置。どうやら大きな“災難”を被られるようだ」

「さ、災難……」

嫌な結果が出たな……急激に訊く気が無くなった。

7

「そして、その先の未来を示しますのは………“月”の正位置。
“迷い”そして“謎”を示すカード………実に興味深い」

「迷いと、謎……？」

「貴方は、これから向かう地にて災いを被り、大きな“謎”を解く事を課せられるようだ。

近く、貴方は何らかの“契約”を果たされ、再びこちらへおいでになる事でしょう。

今年、運命は節目にあり、もし謎が解かれねば……貴方の未来は、閉ざされてしまうかも知れません」

「閉ざされてしまつて……」

しかも、これから向かう地で大きな謎を解く事になる？

契約を果たされる？

曖昧で、現実味のない結果に俺は首を傾げる。

「私の役目は、お客様がそうならぬよう手助けをさせて頂く事でございます」

イゴールが左手を振ると、カードが消えた。

「おっと、ご紹介が遅れましたな。

「こちらは、『マーガレット』。同じくこの住人でございます」

「お客様の旅のお供を務めて参ります、マーガレットと申します」

「……ど、どつも」

すっげえ美人……。

銀の髪に、金の瞳、整いすぎたというか……まるで名工が作り上げた人形のように美しい。

彼女もまた、このイゴールという老人のように、得体の知れなさで浮き世離れた雰囲気を感じられた。

「詳しくは追々に致しましょう」

「えっ？」

「ではその時まで、ごきげんよう……」

「ちよ、待」

待て、という言葉すら発せず　意識が薄れていく。

ちょっと待て、まだ全然意味がわからないし訊きたい事が……。

しかし、俺の願いも虚しく……イゴールの不気味な笑みを最後に、意識を手放してしまった……。

T o B e C o n t i n u e d . . .

く4月11日(月)く(前書き)

始まるぜ、俺のハーレム伝説が!!

「そんな話じゃねえだろコレ!!」

わっ、バカ、まだ本編に出てないんだから出てくんじゃねえよ!!

〓 4月11日(月)〓

『やそいなば八十稻羽八十稻羽』

「　　」

目が醒めた。

広がるのはリムジン……ではなく、電車の中の風景。

……どうやら、眠っていたようだ。

「変な夢……」

恐ろしい類のものではないけれど、ひどく脳裏に残る夢だった。

つと、いけねっ。降りないと！

すぐさま電車を降り、改札口から外へと出ると。

「おーい、こっちだ」

俺に手を振る1人の男性の姿を捉え、その人の元へ。

「おう、写真より男前だな。

ようこそ稲羽市へ、お前を預かる事になってる『堂島遼太郎』()
どうじま りょうたるう)だ。

ええと……お前のお袋さんの弟だ、一応挨拶しておかないとな」

「どうも、稲葉遙です」

頭を下げる。

すると叔父である堂島さんは「堅苦しくしなくていいぞ」と苦笑しつつ、言葉を続けた。

「しっかし大きくなったなー……ちょっと前までオムツしてたと思っただが……」

「……うわー、叔父さんそれセクハラですよ」

「何でそうなる。お前は男だろうが」

「俺にとっては、セクハラになります！」

「……お前、やっぱり姉貴の息子だな」

何故か疲れた様子で納得されてしまった、まあお袋の稲葉陽香いなば はるかはかなり変わっている人だから……。

あれ？じゃあ俺、もしかして変人扱いされてる？

軽くショックを受けていると、堂島さんは自分の隣でチラチラと俺を見てくる小さな女の子を前に出す。

「こっちは娘の菜々子だ。ほれ、挨拶しろ」

「こんにちわ、菜々子ちゃん」

しやがみ込み、彼女と視線を合わせながら声を掛ける。

髪を小さなピンクのリボンで2つに縛り、顔は間違いなく可愛らしい部類に入る。

……十年後が楽しみだ。

「……………にちわ」

しかし、菜々子ちゃんはか細い声でそう言つと、叔父さんの後ろに隠れてしまった。

ガーン……………もしかして、変な事考えてたのがバレた？

「はは、こいつ、照れてんのか？」

からかうように叔父さんがそう言つと、菜々子ちゃんは怒つたように叔父さんの尻を叩く。

「……………」

視線を感じた、菜々子ちゃんと目を合わせると……………逸らされた。

「さあて……………じゃ、行くか。って、何落ち込んでんだ？」

「いえ……………ただ、幼女からのダメージっておもった以上にでかいなあ……………」

「はあ？ よくわからんが早く来い」

「はい……」

くそう、早く菜々子ちゃんと仲良くなりたいなあ。

車に乗り、叔父さんの家に向かう。

「しかし、何もなくてびっくりしただろ？」

「確かに都会に比べればですけどね、でも俺はこつという静かな所は好きですから」

この稲羽市は、山あいの盆地に広がる小さな地方都市だ。

むろん都会とは違って田舎であり、のどかな土地ではあるが娯楽も刺激もない狭い世界である。

今回、俺　稲葉遙がここに来たのは、両親が原因である。

俺の両親、父親の稲葉愁いなはしゆうと母親の稲葉陽香は、各地を転々とするよ
うな仕事をしているらしい。

どうして息子の俺が曖昧にしか知らないのかとというと、両親の仕事には謎が多いからである。

いや本当にわからないのだ、以前訊いたが教えてくれなかったし。

親父はごく一般のサラリーマンみたいな人だが、母親は……本当によくわからない。

天上天下、唯我独尊を地で行くような人で、時折人間ではないので

はと本気で思える。

そんなお袋の血を、俺を色濃く受け継いでいるようだが……正直、喜んでいいのかはわからない。

ちなみに、俺とお袋の関係は「親子」ではなく「殺るか殺られるか」といったようなもの。

……よくわからないな、言った俺自身も。

話を戻すが、俺は小さい頃から転校を続けてきたのだが……今回の移転先はなんと海外。

別に日常会話くらいならできるけど、面倒なのでいっそのこと一人暮らしでいいといった結果……預けられる事になったわけで。

「きみ、高校生？」

「えっ…あ、はい」

ポーっとしていたら、車はいつの間にかガソリンスタンドへ。

叔父さんも菜々子ちゃんもおらず、声を掛けてきたのは……店員さん。

「都会から来ると、なーんも無くてビックリっしょ？」

実際、退屈すると思うよ。高校の頃つつたら、友達んち行くとかバイトくらいだから」

「でも、俺は都会のゴミゴミした所は嫌いだし……それにこころは、

とつてもものどかでのんびりした所だから、気に入りました」

「へえ……きみ変わってるね、なんか年寄りくさいよ?」

「そうかもしれないですね」

「まあいいや、とりあえず宜しくね?」

右手を出す店員さん、つられて俺も手を出し握手を交わす。

「……………?」

あれ?なんか一瞬変な感じが……。

……………気のせい、だよな。

暫し、店員さんと話していると……菜々子ちゃんが戻ってきた。

どうやらトイレに行っていたようだ、店員さんは仕事のためその場から離れる。

菜々子ちゃんがこちらを見つめてくるので、声を掛けようとして……
…頭痛が走った。

「……………だいじょうぶ?」

「大丈夫、ありがとう」

「ぐあい、わるいみたい……………」

「平気だよ」

そう言つて、安心させるように微笑みを浮かべる。

だが……まだ菜々子ちゃんの表情は固い。

仕方ないよな、まだ会つたばかりだし……俺の容姿、少なくともありふれたものじゃないから。

お袋の父親、つまり祖父は外人だつたらしく、クォーターである俺はその祖父の外見を受け継いだらしい。

明るい紫が入つた銀髪に、ライトグリーンの瞳は、日本人離れした容姿だ。

菜々子ちゃんからしてみたら外人を相手にしてるようなものだから、恐いのもかもしれない。

そんなこんなで時は過ぎ、夜今日から一年間、自分の家になる叔父さんの家で、ささやかな歓迎会が開かれた。

「しっかし、兄さんも姉貴も相変わらず仕事一筋だな……今度は海外だつたか？」

「ええ、そうなんです」

「一年だけとはいえ、親に振り回されてこんなところ来ちゃって……子供も大変だ」

「振り回されるのは慣れてますし、今度会ったら仕返しするつもりなんで大丈夫です」

「何の大丈夫なんだよ……。まあ、ウチは俺と菜々子の二人だし、お前みたいのが居てくれると俺も助かる。これからしばらくは家族同士だ、自分んちと思って気楽にやってくれ」

「もちろん、気楽どころかグニャグニャになる気満々ですから!!」

「……胸を張って言うんじゃない。はあ………こういうわけのわからん所は姉貴に似たんだな」

「いやあ、それほどでも」

「褒めてないぞ………まあいい、メシにするか」

「………」

「? どうした、食わないのか?」

食事に手を伸ばさない俺に、叔父さんが首を傾げる。

「………あの、叔父さんの家っていつも惣菜なんですか?」

テーブルに広がるのは、出来合いの弁当やジュース。

「ああ、俺は料理ができんし………菜々子は小さいからな」

「……………」

いかん、それはいかんぞ叔父さん。

菜々子ちゃんみたいなの小さな子に、ちゃんと手料理を与えないなど……俺には我慢できん！！

「叔父さん、明日からは俺が食事を作ります」

「作りますって……お前、料理できんのか？」

「無論です、お袋に振り回されロクなメシにありつけず……こんなつたら自分で作るしかないと思い、8歳の頃からやっていますから！！」

「……お前も苦労してるんだな」

同情された。

と、叔父さんの携帯が鳴る。

舌打ちをしつつそれを取り、少し会話をした後電話を切って……大きなため息をついた。

「仕事でちょっと出てくる、急で悪いが飯は二人で食ってくれ。帰りは……ちょっとわからん。菜々子、後は頼むぞ」

「……………」

寂しそうに頷く菜々子ちゃん。

それを見て少し申し訳なさそうな顔をした後、叔父さんは家から出て行った。

「叔父さん、何の仕事してるの？」

沈黙は嫌なので、菜々子ちゃんと会話をする。

「おとうさん、けいじなの」

「へえ……すごいね」

「……すごくなんかないよ」

急に菜々子ちゃんの機嫌が悪くなった。

あらら、もしかして余計な事言ったかな？

場の空気を誤魔化すためにテレビをつける、するとちょうど新しいニュースが流れていた。

『稲羽市議秘書の生田なまため目太郎たろう氏が、不適切な女性関係から進退を取り沙汰されている問題。

夫人で演歌歌手の柊みずずさんは取材に応じ、慰謝料を求め争う考えを明らかにしました』

あつ、これって今話題になってる不倫騒動だ。

恐いねー、大人の恋愛とか不倫って。

『事態を受け地元テレビ局“あいテレビジョン”は、生田目氏と愛人関係とされる所属アナウンサー……山野真由美さんを全ての担当番組から降板とし、問題解決まで出演を自粛する方針を発表します』

やっぱり、こんな問題になってたらこうなるよな。

「……ニュースつままないね」

言いながら、菜々子ちゃんはチャンネルを変える。

すると、あるCMが流れ出した。

『ジュネスは、毎日がお客様感謝デー。来て、見て、触れてください。』

エヴリデイ・ヤングライフ！ ジュネス！』

「エヴリデイ・ヤングライフ！ ジュネス！」

テレビの歌を真似して、菜々子ちゃんも歌い出した。

にこやかな笑顔、どうやらこの歌が好きらしい。

「菜々子ちゃん、ジュネスの歌好きなの？」

「うん！」

笑顔を返された、あっ……なんかさっきのダメージが回復していく。

「そつだ菜々子ちゃん、明日は何が食べたい？」

「えっ……なんでも、いい……」

「ん、了解。嫌いな食べ物はある？」

「……………ない」

なんでもいいというのは、正直作る側にとっては困る返答だ。

しかし、菜々子ちゃんは俺をまだ警戒してるし……少しずつ仲良くなるらないと。

とりあえず、今はごはんを食べよう。

長時間電車で揺られて疲れたみたいだし、ごはん食べて風呂に入ったらすぐに寝ようかな……。」「……………？」

夕食を食べ、風呂に入り、すぐに寝た……。

というのに、俺は気づいたら……深い霧に囲まれたよくわからない場所に立っていた。

「何だ、ここ……？」

とにかく探索しようと思っ進んで見る事に。

景色は変わらず、深い霧に閉ざされたままだったが……。

真実が知りたいって？

突然、そんな声が場に響いた。

「誰だ!？」

叫ぶが返答は無く、俺は再び歩を進める。

それなら、捕まえてごらんよ

また聞こえた、場所は……奥から聞こえる。

暫し歩き……やがて1つの扉に辿り着いた。

中には気配が、思い切って入ってみる。

「　　っ!?!?」

ぞわりと、背筋が凍る。

おもわず身構え、臨戦態勢に入った。

ふふ……やっつてらんよ

挑発するような声。

「しー！」

よくはわからない、けれど抵抗しなければならないと本能が叫び、俺は拳を突き出す。

手応えは……いまいち感じられない。

へえ……この霧の中なのに、少しは見えるみたいだね

声の中には驚きが含まれ、それを頼りに今度は回し蹴り。

だが、今度は手応えを感じられない。

なるほど……たしかに、面白い素養だ

「何を、言っただんだ!!」

充分に力を溜めての正拳突き。

今度は……手応え有り!!

でも、簡単には捕まえられないよ

求めているものが“真実”なら、尚更ね

「何なんだお前は……一対何を言っている!!」

俺は叫ぶが、声は質問には答えず……辺り一面が更に濃い霧で包まれた。

「ちっ!!」

誰だって、見たいものだけを、見たいように見る

そして霧は何処までも深くなる

「くそっ!!」

相手の姿を捉えられない。

声だけが、頭の中に聞こえてくるような気さえしてきた。

いつか、また会えるのかな？

「こことは、違う場所で

フフ、楽しみにしてるよ

「待ちやがれ!!」

手を伸ばそうとして……意識が急激に薄れていく。

ああ、くそっ、今日はこんな事ばかりだ。

苛立ちは増すばかりで、けれど発散させる事もできず。

俺の意識は、闇へと消えた。

To Be Continued...

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9252z/>

遥くんとペルソナと愉快？な仲間達

2011年12月31日02時47分発行